実践報告

米国大学の学生を対象とした英語での三重地域文化発信

― 国際交流センター・教養教育科目「三重学」における Virtual Exchange の取組み ―

正　路　真　一

Presenting Mie Regional Culture in English for American University Students: A Virtual Exchange Project in a CIER/CLAS class, "Mie Studies"

SHOJI　Shinichi

〈Abstract〉

This article reports a project in a Center for an International Education and Research (CIER) / College of Liberal Arts and Sciences (CLAS) class, "Mie Studies: The Society and Culture of Mie". In this project, class members conducted poster presentations in English, which introduced the regional culture of Mie prefecture, to students at two different universities in the United States. The post-project questionnaire, given to the students who presented, showed a positive correlation between presenters receiving feedback from the U.S audience-students and an increase in motivation to study English.

キーワード：地域文化、米国、英語、プレゼンテーション

1．はじめに

コロナ禍の深刻化により、大学等教育機関でのオンラインツールの重要性が増している。2020 年には世界各国の大学で授業がオンライン化されているが、国際交流の分野においても、インターネットを使った遠隔での授業活動が増すと考えられており、その遠隔活動の形態の一例として Virtual Exchange（VE）や Collaborative Online International Learning（COIL）が挙げられる。VE とは、同期型、非同期型に関わらず、ICT ツールを活用して参加者が共習を行うという緩やかな定義に示されるものであり、活動例としては、複数の拠点間を Zoom 等のウェブ会議ツールで繋ぎ、ディスカッションを行ったりするといったものが含まれる。また COIL は VE よりもやや定義が限定的で、二つ以上の大学でそれぞれ開講されている科目間の連携に基づいて実施される活動を指す。例えば日本の大学と海外の大学の間で、一学期の間で時期的に重複する数週間を使い、アクティブラーニングを促す能動的な協働を課す取り組みなどが COIL に当たる（国際教育研究コンソーシアム 2020）。COIL の活動例としては、静岡県立大学と米国ノースカロライナ大学シャーロット校が 2019 年 10 月から 11

月にかけて実施した共修活動がある。この活動の内容としては、両校の学生がメッセージビデオを作成して、米国大学生は日本語で、日本の大学生は英語を使って自己紹介およびお互いの大学を紹介するといったものなどであった（Yokono & Sawasaki 2020）。

VE および COIL などの意義としては、まず低コストで教育カリキュラムを国際化できるという点、さらに実際に海外に行かずとも学生の意識の国際化を図ることができるという点が挙げられる。例えば、日本人学生が、実際に英語のネイティブスピーカーを相手に英語を話すことで、語学能力の向上のみならず外国および異文化への興味や理解を促進することが期待できる（池田 2016）。こうした利点に鑑みて、関西大学では国際化戦略の教育指針の中で、日本人学生の異文化コミュニケーション能力の涵養を推進することを目的として COIL をカリキュラムに取り入れ、2014 年に COIL 発祥の大学であるニューヨーク州立大学などと初めて COIL 授業を実施し、その後アジア、南米、アフリカ諸国に COIL ネットワークを広げている。さらに関西大学では教職員からなる COIL サポートチームも設立している（関西大学 2020）。

筆者は三重大学の国際交流センター・教養教育解放科目である「三重学：三重の社会と文化」を担当している。この科目は、科目名からも分かる通り三重地域に対する理解と愛着を育むことが目的であることはもちろんであるが、使用言語が英語となっているため、英語能力の向上も授業目的の一つとされている。担当教員である筆者は、本科目において、2020 年前期の 7 月 7 日から 8 月初旬の学期末までの 5 週において VE 活動を取り入れることとした。特にオンラインで進められる授業においては語学学習に必要な発話練習の機会が限られているが、本取り組みはその欠点を補完するものでもある。本稿ではその VE 実践の実践を報告する。

2．取り組みの実践

2．1　参加学生

本取り組みに参加したのは、「三重学：三重の社会と文化」を受講している 11 名の日本人学生と 2 名の外国人留学生（共にドイツの三重大学協定校の交換留学生）である。11 名の日本人学生の内訳は、10 名の 1 年生と 1 名の 2 年生であり、また所属学部は 1 名が人文学部、3 名が教育学部、3 名が医学部、4 名が工学部であった。

2．2　目的と内容

VE を用いた本取り組みの内容は、基本的には、前述の静岡県立大学と米国ノースカロライナ大学シャーロット校の COIL プロジェクトをモデルとした。ただし、この両校の

学生がお互いの大学を紹介し合ったのに対し、本取り組みでは「三重学：三重の社会と文化」の科目の目的に鑑みて、三重県についての情報を調査し、米国大学の学生に発表するものとした。具体的には、本科目の受講学生が各自、三重県に関する何らかのテーマ（名所、食べ物、歴史上の人物など）を設定し、5 分程度のポスタープレゼンテーションにまとめて発表した。本取り組みの全体的な流れとしては、学生たちのポスター発表を学生自身が各自 Zoom で録画し、筆者がそれらを本取り組み用に作成したブログに掲載し、それを米国大学の学生が視聴した上でブログ上にコメントを投稿するという形をとった。このように自身の発表が米国大学の学生に視聴され、感想を述べられることで、発表学生が海外との繋がりをリアルに感じ、英語学習を含む異文化理解への意欲が促進されることが、本取り組みの目的である。（ただし本科目の受講生 13 名のうち 2 名はドイツ人短期留学生であることは前述の通りであり、これらのドイツ人学生の英語能力は総じて日本人学生よりも高いと推察されることに留意する必要がある。）本稿では上の目的が達成されたかについて、本科目の受講生を対象としたアンケート結果に基づいて報告する。

2．3 実施

2．3．1 準備（7 月 7 日～7 月 27 日）

本取り組みでは、7 月 7 日～27 日の約 3 週間を準備期間とした。まず、7 月 7 日に、2.2 節に述べたような本取り組みの概要を説明し、作成したブログの画面を見せ、そして多くの受講学生にとって馴染みがないであろうポスタープレゼンテーションという発表形態について説明した。そして、7 月 7 日から 7 月 13 日までの一週間を、各受講学生が発表のテーマを決める期間および調整期間とした。調整期間とは、複数の学生が重複したテーマを選んだ場合にどちらか一方の学生に別テーマを選ばせる期間である。テーマは、「三重県に関わりのあるもの」という緩やかな規定のみを学生に提示し、学生自身にテーマを選ばせた。その結果、計 13 名の受講学生が、伊勢神宮、おかげ横丁、伊賀組紐、伊賀忍者、赤目四十八滝、鳥羽、真珠の養殖、鈴鹿サーキット、鈴鹿青少年の森、四日市工業地帯、長島リゾート、三重県の五つの地域の特色、三重県の神話をテーマとして選んだ。

さらにこの時期に、米国大学の学生をポスタープレゼンテーションの視聴者として確保する必要があったため、筆者の前任校である米国クレムソン大学の学生団体「日本クラブ」に所属している学生と、同じく筆者の前任校である米国ノースカロライナ大学シャーロット校の夏学期の日本語科目を受講している学生に、それぞれの大学の日本語科教員を通して協力を依頼した。（ノースカロライナ大学シャーロット校は、第 1 章で述べた通り、静岡県立大学と協働して昨年度 COIL プロジェクトを実施した大学である。）ただし、これらの米国

大学の学生の視聴、コメントはあくまでも任意であり、何人の学生が協力してくれるかについて多大な期待はできないことを、仲介役となった当該米国大学の教員から伝えられた。

次の一週間は（7 月 14 日〜20 日）、パワーポイントを使ったポスター作成期間とした。筆者が過去に実際の学会で使用したいくつかのポスターを例として挙げ、プレゼンテーション用ポスターの作り方を説明した。本科目受講生の多くは一年生であったため、中にはパワーポイントに慣れていない学生もいたので、基本的なパワーポイントのスライドの作り方についての説明動画も作成し、学生に提示した。

次の 1 週間弱（7 月 21 日〜26 日）を、プレゼンテーション録画期間とした。ここでは、Zoom を使って自身を録画する方法を説明したワードファイルと説明動画を作成し、学生に提示した。ただし、どうしても Zoom を使って自分を録画することができないという学生に対しては、最低限、携帯電話のボイスメモ機能等を使って自分の発表の音声を録音し、その音声ファイルを筆者に提出することとした。結果、1 名の学生が動画ではなく音声ファイルを提出したので、この学生のプレゼンテーションに関しては、筆者がその音声ファイルを再生しながら Zoom でその学生のポスターを表示して録画した動画ファイルを作成したが、音声の質の劣る動画ファイルとなってしまった。全てのプレゼンテーション動画ファイルは、7 月 27 日に筆者によってブログに掲載され、米国大学の学生が視聴する準備を整えた。ブログは一般的な検索ツールでは見つからないよう、URL を知っている者のみ視聴可能と設定した。

2．3．2　発表実施とコメント（7 月 28 日〜8 月 4 日）

ポスター発表の視聴者となる米国大学の学生に対しては、本取り組みを“Mini Virtual Conference: Introduction to Mie”と題し、全てのポスター発表動画が掲載されたブログへのアクセスをメールにて依頼した。具体的なブログ公開時期として、7 月 28 日から前期最終日の 8 月 4 日までを Mini Virtual Conference 期間とし、この間に米国大学生の視聴とコメントを募った。求めるコメントの内容としては、プレゼンテーションの内容、発表者の英語運用能力、ポスターのデザインなどに関する感想、批評、助言などであることを、事前の周知メールで伝えるとともに、ポスタープレゼンテーション動画を掲載したブログの冒頭に掲載して伝えた。さらに、プレゼンテーションを行った本科目の受講生本人たちにも、最低三つ以上のクラスメートのプレゼンテーションを視聴し、コメントを投稿するよう指示した。

7 月 28 日から 8 月 4 日までの間に、13 のプレゼンテーションに対して合計 35 件のコメントが米国大学の学生から寄せられた。コメントを投稿した米国大学の学生数は、投稿者

名が明示された投稿から確認できたものが 7 名であり、この 7 名から 28 件のコメントが投稿された。その他匿名の投稿が 7 件あったが、これらの投稿が何名の学生から寄せられたものかは定かではない。コメントのほぼ全ては発表者に対する好意的な評価であり、また発表者の英語の発話に対する評価や英語文法及び語彙に関する助言も多かった。

3．事後アンケートとその結果

2020 年前期最終日に、本科目を受講した発表者の学生 13 名を対象に、本科目「三重学：

7 月の「米国大学生への三重についてのポスター発表プロジェクト」についてのあなたの評価 Your evaluation on the Poster presentation project toward American University students (in July)

① このプロジェクトに対するあなたの全体的な評価（一つ選んでください）。Your overall evaluation on this project (Choose one)
・とても良かった Very good
・良かった Good
・どちらとも言えない。Not sure
・あまり良くなかった Not good very much
・全然良くなかった Not good at all
→上の答えを選んだ理由は何ですか（自由記述回答）Why did you choose the above answer? (Please describe)

② このプロジェクトの課題に対する評価（複数回答可） Your evaluation on the assignments (making a poster and recording your presentation) (Choose as many as you want)
・ポスターを作るのが難しかった。It was difficult to make the poster
・ポスターを作るのが時間がかかった。It was time-consuming to make the poster
・動画を録画するのが難しかった。It was difficult to video-record my presentation
・動画を録画するのが時間がかかった。It was time-consuming to video-record my presentation
・難しくもなかったし、時間もかからなかった。Neither difficult nor time-consuming
・その他 Other（　　）

③ あなたのプレゼンテーションについてブログに書かれたコメントについて、どう思いましたか。（自由記述回答）What do you think about the comments for your presentation on blog? (Please describe)

④ あなたのプレゼンテーションにコメントを書いてくれた米国大学の学生の皆さんにメッセージを書いてください。（自由記述回答）Please write a message to the American university students who gave comments on your presentation. (Please describe)
（この回答は、米国大学の学生の皆さんに渡します。Your answers for this question will be given to the American University Students.）

⑤ このプロジェクトを通して、異文化理解への意欲が増しましたか（一つ選んでください）。Do you think your motivation for understanding different culture increased? (Choose one)
・とても増した。Increased a lot
・少し増した。Increased a little
・変わらない。Not changed
・少し減った。Decreased a little
・とても減った。Decreased a lot
→上の答えを選んだ理由は何ですか（自由記述回答）Why did you choose the above answer? (Please describe)

⑥ このプロジェクトを通して、英語学習への意欲が増しましたか（一つ選んでください）。Do you think your motivation for studying English increased? (Choose one)
・とても増した。Increased a lot
・少し増した。Increased a little
・変わらない。Not changed
・少し減った。Decreased a little
・とても減った。Decreased a lot
→上の答えを選んだ理由は何ですか（自由記述回答）Why did you choose the above answer? (Please describe)

⑦ 皆さんの PowerPoint やプレゼンテーション動画を、来学期のこのクラスで、サンプルとして見せたいと思います。サンプルとして授業で使われたくない人は、そう書いてください。Shoji-sensei wants to use your PowerPoints, presentation movies, etc. as samples in the next semester. If you want him not to use your work, please write so.

図１　アンケート質問①～⑦

三重の社会と文化」に対する評価及び意見を聴取するためのアンケートを実施した。このアンケートの中の一つのセクションとして、本稿に報告する VE を活用した取り組みに対する質問を含めた。その質問を図 1 に示す。

図 1 にある質問のうち、本稿では、本取り組みに対する全体的な評価（質問①）についての学生の回答を 3.1 節で、米国大学の学生のコメントに対する感想（質問③）を 3.2 節で、異文化理解に対する意欲の増減（質問⑤）を 3.3 節で、英語学習に対する意欲の増減（質問⑥）を 3.4 節において報告する。

3．1　本取り組みに対する全体的な評価（質問①）

質問①「このプロジェクトに対するあなたの全体的な評価」に対する回答（選択式）と、その回答を選んだ理由（自由記述式）を表 1 に示す。また、表 1 右列の自由記述回答については、各回答に回答者を記号で付記する。日本人学生 11 名については JS 1〜JS 11、ドイツ人学生 2 名については GS 1〜GS 2 と記す（JS は Japanese student を、GS は German student を表す。）この記号は、本稿の全ての表（表 1〜4）に共通であり、例えば、表 1 で JS 1 として示される学生と表 2 で JS 1 として示される学生は同一人物である。なお、自由記述回答については、回答の言語を英語とも日本語とも指示しなかったため、英語で回答した学生と日本語で回答した学生がいた。

表 1　質問①「このプロジェクトに対するあなたの全体的な評価」に対する回答

回答選択肢	回答数と割合	左の回答を選んだ理由（原文ママ）
とても良かった	4（30.8%）	●（JS 5）I have experienced a lot of things I have never done before. ●（JS 9）I have never had the opportunity to get a advice from native speaker living in America. So, this was a very valuable experience. ●（JS 7）This project was the opportunity to gain the knowledge of power point. I can speak English a lot. It was very fun. ●（JS 2）Because I was glad that other people appreciated the slides I made from the beginning and the presentation I practiced.
良かった	7（53.8%）	●（JS 1）ポスタープレゼンテーションなど、新しいことができて勉強になったから。 ●（JS 3）高校の時にはできなかった類のものをすることが出来たから。 ●（JS 8）自分自身で三重を調べる機会になったのもいいと思ったし、それを英語で書くということで英語力の向上にもなったから。また自分の英語のプレゼンテーションを外国の方に見てもらう機会なんてめったにないのですごく貴重な体験になったと思う。 ●（JS 11）他人に発表したい内容を伝えるためにそれ以上の内容を知ることができたから。

		●（JS 4）It became an opportunity to know Mie prefecture, learning in English. How to make the presentation poster depends on you, so I could watch variety of the poster. ●（GS 2）Of course because of corona we couldn't meet in person and so any presentation as we used to, but I received a really helpful comment on my poster presentation from a American student and I liked the fact that we are able to receive that through the blog. ●（JS 6）記述なし
どちらとも言えない	0	NA
あまり良くなかった	1（7.7%）	●（GS 1）I just don't like being recorded giving presentations and it being uploaded on the internet.
全然良くなかった	1（7.7%）	●（JS 10）英語がたどたどしく、また、ポスターの内容が少なすぎて、プレゼンテーションの尺が指定の時間に届かなかったなど。

表 1 の通り、「とても良かった」と「良かった」という選択肢に回答の多くが集中していることから、本取り組みに対する学生の評価は概ね高いと推察される。これらの回答が選ばれた理由としては、6 名が、これまでしたことのない新しい経験ができたということに言及している。具体的には、英語のネイティブスピーカーに発表を見せてコメントを得られたこと、パワーポイントの使い方を学べたこと、ポスタープレゼンテーションをしたことなどである。逆に「あまり良くなかった」と回答された理由はインターネット上で自身のプレゼンテーションを公開したくないという学生の気持ちであり、また「全然良くなかった」と回答された理由は自身のプレゼンテーションの出来具合に関するものであった。これら二つの回答は、取り組みの内容自体に関わるものではない。

また、表 1 に示されるように、（日本語よりも英語の方が能力が高いと思われるドイツ人学生を除き）本取り組みに高評価を与えている学生ほど、英語で自由記述回答を記述している者が多いようである。これには、これらの学生が英語を使うことに抵抗がなくなったあるいは意欲的になったという解釈が可能であるが、もともと英語能力が高い学生であったという可能性、あるいは偶然の結果という可能性なども考えられる。

3．2 米国大学の学生からのコメントに対する感想（質問③）

質問③「あなたのプレゼンテーションについてブログに書かれたコメントについて、どう思いましたか」に対する回答（自由記述）を表 2 に示す。この質問に対する回答から、発表者である三重大学の学生たちが米国大学の学生の反応からどのような教育効果を得られたかについて推察する。なお、この質問は自由記述回答式であったが、回答を筆者がい

くつかの種類に分類して表の左列に示す。

表 2　質問③「あなたのプレゼンテーションについてブログに書かれたコメントについて、どう思いましたか」に対する回答

回答の種類	回答数と割合	回答（原文ママ）
自身の発表にコメントをもらえたことへの感謝	5（38.5%）	●（JS 5）I thought it was a valid opinion. ●（JS 7）I was very happy because of those comments. ●（JS 9）In high school, I don't have many chances to learn about speaking English. So, I'm glad to get a advice about speaking ability. ●（GS 1）I'm thankful for the feedback. ●（GS 2）As I said before I received a really helpful one from an American student.
自身の発表の間違いの指摘に対する言及	2（15.4%）	●（JS 4）Some people said that my presentation was not bad, but my poster is kind of dark. I think It is not easy to read, too. ●（JS 6）I think that pronunciation is so difficult.
自身の発表に対する高評価への感謝と喜び	4（30.8%）	●（JS 2）I was honestly happy because everyone praised me for my hard work. ●（JS 8）少々のミスはあったがほとんどの人が“clear”だと発表をほめてくださったり、三重県について知れたと言ってくださったので嬉しかった。特に英語の発音に自信がなかったので、発表自体を褒めてもらったことで自信にも繋がった。 ●（JS 10）暖かい言葉がありがたかった. ●（JS 11）素直に嬉しかった。頑張ってやり遂げてよかったと思えた。
自身の発表の間違いの指摘に対する感謝	2（15.4%）	●（JS 1）文法や単語の間違い、改善点を指摘していただいたのがよかった。invent と invite のことに関しては、「誘致された」の意味で使ったのだが、意味的に違ったのだろうという点で勉強になった。 ●（JS 3）感想ばかりでなくて、改善点なども書いてくださったので良かった。

表 2 の通り、最も多くの回答を集めたのは、「自身の発表にコメントをもらえたことへの感謝」であった。また「自身の発表の間違いの指摘に対する言及」も 2 名から寄せられた。これらの回答からは、米国大学の学生のコメントから具体的にどのような教育効果を得られたのかは読み取れない。一方、「自身の発表への高評価に対する感謝と喜び」を示す回答も 4 名と比較的多く、これらの回答からは、本取り組みが学生の英語能力およびプレゼンテーション能力への自己肯定感や自信の獲得につながったという可能性が示唆される。さらに「自身の発表の間違いの指摘に対する感謝」を表す 2 名の回答の中には、特定の英単語の使い方に関する言及があり、語学学習上の具体的な学習効果が示唆されている。

また、表 2 に示されるように、具体的な教育効果が読み取れない類の回答（「自身の発表にコメントをもらえたことへの感謝」と「自身の発表の間違いの指摘に対する言及」）が全て英語での回答であったのに対し、具体的な教育効果が読み取れる回答（「自身の発表への高評価に対する感謝と喜び」と「自身の発表の間違いの指摘に対する感謝」）はほとんどが日本語での回答であった。これには、回答を英文で書く能力に欠ける（比較的英語能力が低い）学生の方が、米国大学の学生のコメントから目に見える影響（自信の獲得など）を受けたという解釈が可能であるが、あるいは単に偶然の結果という可能性もある。

3．3　異文化理解への意欲の増減（質問⑤）

質問⑤「このプロジェクトを通して、異文化理解への意欲が増しましたか」についてであるが、この質問の曖昧さついて筆者の説明と反省が必要である。本取り組みは三重県のことについて調べて発表するものであるので、発表者の出身地によって、その発表の内容が異文化であったり異文化でなかったりする。ドイツ人留学生にとっては発表の内容が異文化であるので、質問⑤の趣旨が「三重県のことを発表することで三重県（＝異文化）に対する意欲が増したか」と解釈されたであろうし、逆に三重県出身の日本人学生にとっては発表内容である三重県は異文化ではないので、質問⑤の趣旨が「米国大学の学生との交流を通じて外国文化（＝異文化）に対する意欲が増したか」と解釈されたであろう。また三重県外出身の日本人学生にとっては、上の両方の意味で解釈された可能性がある。筆者自身も意図が曖昧なまま設問してしまったというのが実際のところで、今となっては、「異文化理解」と問うのではなく、本科目の内容に鑑みて、「他の学生の三重県に関するプレゼンテーションを見て、三重県の理解に対する意欲が増しましたか」とすべきであったと考えている。そして本取り組みの目的を、第一に「外国語学習への意欲の喚起」、第二に「三重地域文化理解への意欲の喚起」とし、上の設問を第二の目的の達成度を調べるものとすべきであった。

上に述べた問題点に留意する必要があるが、質問に対する回答（選択式）と、その回答を選んだ理由（自由記述式）を表 3 に示す。

表 3　質問⑤「このプロジェクトを通して、異文化理解への意欲が増しましたか」に対する回答

回答選択肢	回答数と割合	左の回答を選んだ理由（原文ママ）
とても増した	5（38.5%）	●（JS 1）三重について調べ、発表することで、逆に別の国の人たちは自分の国についてどんな発表をするのだろうと興味を持ったから。 ●（JS 10）別にまるっきりこちらの意図を伝えれないわけではないと感じたから。

		●（JS 5）I have more opportunities to come into contact with English. ●（JS 2）I was able to get various perspectives. ●（JS 7）記述なし
少し増した	6（49.1%）	●（JS 3）いろんな人の経験を知ることができたから。 ●（JS 8）自分の住んでいる地域のことを調べることで他の地域ではどうかなと外へ目を向けるいい機会になったと思うから。 ●（JS 4）We could communicate with foreigners. It is exciting. ●（JS 9）I made a poster with English. It was hard. But because of using many English words, I became more interested in English and different cultures. ●（GS 2）Because from the beginning I am studying Japanese culture I hade a lot of interest, but through this class my interest for little and sometimes not that famous and spectacular places increased. ---------- ●（JS 6）記述なし
変わらない	2（15.4%）	●（JS 11）三重県のことしかテーマにしていないから。 ●（GS 1）I'm always interested in other cultures.
少し減った	0	NA
とても減った	0	NA

表 3 に示されるように、「（異文化理解への意欲が）とても増した」あるいは「少し増した」とする回答が多く、本取り組みの効果をある程度肯定する結果となった。異文化理解への意欲とは、具体的には、三重（＝自身の文化）について調べることで他の地域（＝異文化）についても興味を持ったという内容のもの、また米国大学の学生への発表を通して英語（＝異文化）の学習に意欲を持ったという内容のものが見られる。ただし、「（異文化理解への意欲は）変わらない」とする回答の一つは、その理由を「三重県のことしかテーマにしていないから」としており、おそらくはこの学生が三重県出身であるため、「異文化」について問う質問の対象に該当しないと考えた可能性が高い。これには、前述の通り筆者の設問の曖昧さによる影響が反映されていると考えられる。

3．4　英語学習への意欲の増減（質問⑥）

質問⑥「このプロジェクトを通して、英語学習への意欲が増しましたか」に対する回答（選択式）と、その回答を選んだ理由（自由記述式）を表 4 に示す。また、この質問に対して無回答であった学生が 1 人いたことを、表の最下段に付記する。

表 4　質問⑥「このプロジェクトを通して、英語学習への意欲が増しましたか」に対する回答

回答選択肢	回答数と割合	左の回答を選んだ理由（原文ママ）
とても増した	7（53.8%）	●（JS 5）I have more opportunities to come into contact with English. ●（JS 7）I had the opportunity to speak English. ●（JS 2）I read the comments of everyone's impressions and felt that I wanted to have more conversation in English. ●（JS 9）This class was very fun. So I became more interested in studying English. ●（JS 8）英語で伝えなければいけなかったので、先生に添削していただけるとは言えども、やらなければという責任感みたいなものを感じたから。 ●（JS 3）英語が出てこなかったり、時間がかかったりしてもどかしかったから。 ●（JS 10）異文化理解に関してと同様。（＝質問⑤の回答「別にまるっきりこちらの意図を伝えれないわけではないと感じたから。」）
少し増した	3（23.1%）	●（JS 4）I understood I can interact with people all over the world by using English. ●（JS 1）他の人に正確に自分の考えを伝えるために、語彙や文法を正しく使っていかなければならないと思ったから。 ●（JS 11）下手なりに英語をうまく話そうとしてみることができたから。
変わらない	2（15.4%）	●（GS 1）There's not so much to learn anymore for me since my minor is English at my home university. ●（GS 2）From a young age on I try to include English in my everyday life, like reading in English or watching in English, but I was really happy to use it in class and speak a little, because for me there are not many chances to speak in English.
少し減った	0	NA
とても減った	0	NA
無回答	1（7.7%）	●（JS 6）

まず、予期されたことであったが、英語能力が高いと思われるドイツ人留学生 2 名は、英語学習に対する意欲に変化はないと回答した。ヨーロッパ系の留学生に対しては、本取り組みは英語学習意欲を喚起するための活動としては難易度が低すぎたと推察される。日本人学生 11 名については、うち 7 名が「（英語学習に対する意欲が）とても増した」と回答しており、本稿で取り上げたアンケート結果の中で最も確からしい教育効果が示された。英語学習の意欲が増した理由としては、英語で米国大学生とコミュニケーションをとる機会が得られたからというものが多く、また「別にまるっきりこちらの意図を伝えれないわ

けではないと感じたから」といったような自信の獲得を示すもの、また逆に「英語が出てこなかったり、時間がかかったりしてもどかしかったから」といったような自身の能力不足を感じたものまで、様々であった。

4．考察

まず、本取り組みに対する全体的な評価を聞いた質問①の結果から、この取り組みが学生たちにとって、これまでしたことのない新しい経験を与えられたと評価できる。その新しい経験の内容とは、（前述の通り）英語のネイティブスピーカーに発表を見せてコメントを得られたこと、パワーポイントの使い方を学べたこと、ポスタープレゼンテーションについて学べたことなどであるが、特に第一の点が VE を活用した意義だと考えられる。第 1 章で述べた通り、日本の大学に在学する日本人学生にとって、実際に海外に行くことなく海外の大学の学生と交流できることは、経済的な負担がないことを含め、大きなメリットであると思われる。特に外国語の学習に重きを置く学生にとって、学習言語の母語話者とやりとりすること、また母語話者による自身の外国語運用に対する評価やコメントを得ることは重要な体験であろう。英語学習の意欲への影響についての質問⑥及び米国大学の学生から寄せられたコメントに対する感想を聴取した質問③の結果からも、米国大学の学生に対して英語を使うこと、英語が通じることの喜び、自信の獲得、また自身の課題の認識などが感想として得られた。こうした効果は、学習対象言語を母語とする話者によって提供されるものからこそ説得力を持って学生に与えられるものである可能性が高い。それは例えアカデミックな能力や経験に乏しい者（例えば普通のアメリカ人の大学 1 年生）によるフィードバックであったとしても、である。その理由は学習言語を母語として自然に操ることができる者との直接的なやり取りから得られるものであるからに他ならない。こうした効果を得ることが VE の強みであり、本取り組みにおいてもその効果が得られたことが確認されたと考える。

その他、本取り組みによって得られた効果として質問①に挙げられたパワーポイントの使い方を学べたという評価については、全 13 名の受講生のうち 11 名を占めた 1 年生にとって特に有益な経験であったと考えられ、さらに、ポスタープレゼンテーションについて学べたという評価からは、ポスターという形態を使ったプレゼンテーションは比較的他科目では実施されることの少ないものであることが反映されていると推察される。

5．おわりに

本稿は、VE を用いた三重大学の学生と米国大学の学生の交流活動を報告した。本取り

組みが、VE を活用して教育カリキュラムの国際化を試み、受講学生の語学学習および異文化理解への意欲の喚起を目的としたものであることは、2.2 節で述べた通りである。事後アンケートの結果、三重大学の学生（特に日本人学生）にとって、とりわけ英語学習への意欲を高める効果が示唆された。しかしながら、本取り組みの反省として、いくつかの点が挙げられる。第一に、情報の発信が一方通行であったことである。本取り組みは三重大学の学生が三重県についてプレゼンテーションをするという内容であり、米国の学生が米国についての何かを紹介するという行程はなかった。英語学習の観点から見ると、スピーキングの演習にはなったものの、リスニングの演習に相当するものはなかった。これに対応するには、米国大学の学生から三重大学の学生への発信を組み込む必要があるが、これは米国大学の学生にも一定の負担を課すものであるため、先方にも何らかのメリットを与えるものを考案する必要があると考えられる。例えば前述のノースカロライナ大学シャーロット校と静岡県立大学の COIL プロジェクトのように、日本語を学習する米国大学の学生にとって日本語演習の場となるようなものも作る必要がある。労力と時間的な制約を含め、今後の検討課題である。

第二の反省点として、本取り組みに参加した 2 名のドイツ人留学生にとって、英語の演習という活動があまり意味のないものであったことである。この 2 名のドイツ人の英語能力は概ね日本人の受講学生よりも高く、また日本に留学に来ているドイツ人にとって英語は重要な学習対象ではない。従って、本科目の学習内容が三重地域文化の学習と英語の学習であるとは言え、英語学習の比重が前者を上回るべきではないと考えられる。このバランスをどのように取るかも、担当教員にとっての課題である。

参考文献

池田佳子（2016）「「バーチャル型国際教育」は有効か－日本で COIL（Collaborative Online International Learning）を遂行した場合」『国際交流』vol.67, 1-11.

関西大学 Institute for Innovative Global Education（2020）「KU-COIL」（http://www.kansai-u.ac.jp/Kokusai/IIGE/jp/resources/KU-COIL.php）

国際教育研究コンソーシアム（2020）「第 3 回国際教育のスピリットを取り込もう！ Virtual Exchange（COIL）を超短期間ででも取り込む手法ワークショップ＜報告＞　池田教授による日本語版解説」（http://recsie.or.jp/wp-content/uploads/2020/05/8602954c088550321db1ae29de894d4f.pdf）

Yokono, Yukiko & Sawasaki, Koichi.（2020）. Cultural exchanges via flipgrid and ML（mailing list）: How to effectively interact beyond textbooks and time zones. Paper presentation at Southeastern Association of Teachers of Japanese, February 2020, University of Memphis, TN.